慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	談話を支える言語・非言語的手段の連続性：命題性の低い表現の使用と機能
Sub Title	The continuity of verbal and nonverbal cues in discourse: use and function of expressions with low propositionally
Author	籏野, 智紀(Hatano, Tomonori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.243(34)- 255(22)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0255

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

談話を支える
言語・非言語的手段の連続性
── 命題性の低い表現の使用と機能 ──

籏野　智紀

1. 序論

これまでの言語学、コミュニケーション論において、言語・非言語問わず、多様な伝達手段がさまざまな基準で類型化されてきた。古くは品詞の観点から分類したものもあれば、命題とモダリティ、あるいは情報構造など、これまで言語学の下位分野の多くの側面から、コミュニケーションを実現するための資源について議論がなされてきた。これらの議論は、人間による言語の使用が、決して1つの側面から記述・説明できるものではなく、書き言葉か話し言葉かという言語使用の位相、そこに参与する人数、それが引きおこる状況など、多くのことを考慮しなければならないことを示唆している。Halliday & Matthiessen (2004) は、機能主義言語学の観点から、言語の機能として、観念構成的機能、テクスト的機能、対人関係的機能の3つを挙げたが、いかなる表現もこれらの機能を有する可能性があることは、言語コミュニケーションがある文脈の中で起こり、ある文脈を作りだすという前提が存在する限り、まぎれもない事実であろう。

では、手段としての言語を用いて、よりわかりやすい文脈を作り出すために、どのような資源が、われわれには用意されているのだろうか。ここでいう「わかりやすい文脈」とは、文のレベルを超えた、「談話」を支える必須の要素である。言語は線状性を持っているため、コミュニケーショ

ンにおいて談話は文脈なしでは成立しえないし、文脈を作り出すために、命題と命題、あるいは情報と情報をつなぐための、命題性の低い「接続表現」を用いることが必要となってくる。例えば、接続詞や副詞に代表されるような表現がそれに該当し、話し言葉、書き言葉両者にそれは使用される。接続表現によって文脈はより明確に創出され、そして理解される。その結果、談話、あるいは段落や複段落という、より複雑で高度なコミュニケーションが可能となってくるのである。

もちろん、複数の命題をつなぐのは、言語表現ばかりではない。社会言語学のパラダイム以降さらに注目を浴びている、非言語の手段も不可欠である。言語の線状性を克服するために、言語の表出と同時に身振り手振りなどの手段を用いることは、われわれの日常の話し言葉の言語使用において、しばしば見受けられる。話し言葉、あるいは視覚的効果を狙った近年のメールなどにおける書き言葉について考える際には、命題性の低い資源の中で、言語的手がかりと非言語的手がかりをより連続的に観察することが必要である。

本稿では、これら言語の線状的性質を前提とした談話の創出と理解の仕組みを明らかにするための第一歩として、日本語と英語における、命題性の低い言語・非言語の資源について論じたい。既存の品詞の枠組み、位相差、使用域などにとらわれず、広く伝達手段・資源をとらえ、それらをわれわれが使用する意義と機能について考える。それにより、人間がコミュニケーションを行なう際の、すなわち、伝えたい、理解したい文脈を構築する際の思考の過程を明らかにすることを目標とする。省いても命題の観念的意味そのものにはあまり影響を及ぼさない手段を、なぜわれわれは適切に使用することが求められるのかについて、コミュニケーションの動態性を踏まえた、相互行為の社会言語学の観点から論ずることが目標である。

2. 先行研究・問題意識

談話を構築する際に使われる言語的手がかりについて、これまで数多くの研究が、独自の定義を用いて記述を試みてきた。それらは、「談話標識

(Discourse Marker)」、「語用論的標識（Pragmatic Marker)」、「談話接続表現（Discourse Connective)」、「語用論的不変化詞（Pragmatic Particle)」、「談話移行標識（Discourse-shift Marker)」など、さまざまな用語により、それらの使用と機能について述べてきた。ここでは、そのいくつかを挙げ、研究の意義と特徴を述べたい。

佐久間（1992）は、日本語の談話における文脈を展開させる表現の機能を論じた。品詞論や構文論における接続詞や接続語を、音声資料における「つなぎ言葉」も含めて広くとらえることで、句・節・文レベルのあらゆる表現形式を観察することに成功した。一方、指示表現や応答表現は、文脈展開の機能の違いから、「接続表現」とは区別して扱うとしている。また、大石（1954）は、接続表現が談話において現れる位置に注目するとともに、それらが明確な目的を持って使用される談話から、省かれても文意に影響を及ぼさない談話まで、類型化を行なった。そのうえ、使用者の性別、教養、年齢という3つの位相からそれらを観察し、無意味に近い「遊び言葉」が日常談話に多いと結論付けた。日本語教育の分野においては、庵ほか（2001）が、「順接」、「例示」、「並列」などの接続詞の機能を類型化したうえで、接続詞の使い方を知るには、結びつく単位、前後の表現、文体的性格などに注意しなければならないとしている。他にも、談話構築のための言語的手がかりを、待遇表現として扱ったもの、言語行動の構造の中で論じたものなど、話し手、聞き手の心的態度を考慮して研究したものが多くみられる。

一方、英語における表現を扱ったものとしては、接続表現の範囲を、語だけにとどまらずより動態的にとらえたものが多い。その結果、まずその接続表現を構成する語の命題的意味を記述することで、その談話における役割や心的態度の記述の出発点とする傾向にある。例えば、Halliday & Hasan (1976) は、*and* や *to sum up* などの表現を談話の結束性の観点から論じている。複数の情報を配列するという言語使用の基本的な特性を論じるために、言語を機能的視点で観察することで、のちの談話の手がかりの研究に示唆を与えた。また、20世紀終盤の相互行為の社会言語学の視点か

らは、Schiffrin (1987, 2001) が、談話の手がかりを研究する際には、言語外的な要素を考慮することが必要であると述べた。具体的な談話標識に焦点を当てる際には、それらの使用や文脈のみを観察するだけでは統一的な理論を構築することはできないとし、談話そのものを理解するための道具として談話標識をとらえなおすことが求められるとした。Schourup (1999) は、談話標識を下位分類化したうえで、これらが日本語におけるヨ、ゼ、ネなどの終助詞に該当するとし、あらゆる言語においてこれらの談話の手がかりが普遍的に存在するのかどうか、という疑問を投げかけた。その他にも、間投詞の意味記述を試みたもの、副詞句の挿入の機能について論じたものなどがある。これらの研究は、さまざまな位相とそれに伴う言語表現を考慮したことにおいて、有意義なものである。

一方、談話において非言語の表現が手がかりとなりうることを述べたものとして、井上（2007）がある。コミュニケーションにおいて、主トラックである言語的メッセージと副トラックである形式的、物理的、非言語的シグナルが存在し、副トラックは主トラックの解釈に制約を与えるとしている。このような研究により、命題性とモダリティ、言語と非言語など、少なくともコミュニケーションには2つの階層が存在し、それぞれの後者が前者の解釈に作用する、すなわち文脈を与える、ということが示唆される。

このように、談話展開を調整する言語・非言語の手段をさまざまな観点から論じ、その機能を例文とともに記述した先行研究は多い。しかしながら、数多くの手段である言語・非言語の表現が連続性をなしているという事実を、品詞や使用状況の境界にとらわれず、談話展開の手がかりの機能的観点から包括的に述べたものは少ない。よって本稿では、これまで数多くの先行研究で取り上げられてきた、非言語のものを含む、命題性の低い談話展開の手段を今一度列挙し、それらに共通した特徴、および機能の差異をもとに類型化したい。また、日本語と英語の両者についてそれを考えることで、人間の言語使用の普遍的方略について理解することを試みたい。

3. 談話展開のための手段

談話を展開する手段の要件として、これまでの先行研究を参考にする限り、以下の6つが主に挙げられる。すなわち、話し手の意図を示す、聞き手の注意を喚起する、文脈における手がかりとなる、命題に影響なく削除できる、叙法姓を持った慣用的不変化詞である、テクストから独立するがコンテクストに依存する、の6つである。これらの要件を満たした表現には、主に機能として、談話構造を提示するとともに、談話をより適切に聞き手に理解してもらうための社交的機能も持っていると思われる。いわば、文や談話の間に挿入される、談話の命題と使用者の有する態度とを繋ぐ不可欠な要素であるといえる。

話し言葉、書き言葉などの位相を問わずに、上記の要件を考慮すると、談話展開の手がかりとなりうる表現として、以下のものが挙げられる。

(1) a. 副詞（adverb）
b. 接続詞（connection）
c. 終助詞（postposition）
d. 垣根表現（hedge）
e. 感情表出系感動詞（emotive interjection）
f. フィラー（filler）
g. あいさつ（greeting）
h. 応答表現（response）
i. 呼びかけ（call）
j. かけ声（shout）
k. 相槌（backchannel）
l. 非言語の手段（nonverbal markers）

これらの表現の中には、もちろん言語により存在しないものもあるかもしれないし、また、例えば「応答表現」と「相槌」など、その境界がやや曖昧と思われる場合も存在する。あくまで、上記の表現は談話展開に一定の

効果をもたらすことを保証するものではなく、使用者の工夫により、談話展開の創出・理解をしやすくする可能性を持つというだけである。よって、この列挙した表現の中でも、その頻度や命題性の程度には差異がある。

まず（1a）の副詞であるが、これには、タトエバやイワユル、*maybe* や *however* などの表現が考えられる。副詞は上記の表現の中でもとりわけ命題性が高く、談話展開の機能として文全体を修飾するのみならず、文中のある特定の語を修飾する機能も持っている。ある副詞を文中から省くことで、命題・情報そのものが変化し、話し手の意図が聞き手に適切に伝わらなくなることも多い。しかしながら、文修飾の副詞については、談話の中において、前出の文や段落との命題の関係性を示したり、話し手の心的態度を表したりするにすぎない。日本語においても英語においても、節や文の冒頭に用いられることが多い。

（1b）の接続詞は、ダカラやダガ、*and* や *that* などが挙げられる。その品詞の名の通り、節や文、段落を接続し、談話展開の方向性を明示する機能を持っている。だが、日本語と英語とでは、その使用が異なる。日本語においては、上述の副詞と接続詞の境界は曖昧である一方で、英語においては、接続詞が使用されるとき、必ず2つの節を繋ぐことが求められる。なお、日本語では、接続助詞がその役割を担う。しかし、話し言葉においては、句読点の要素が考慮される必要がないため、副詞と接続詞の境界は日英両語において曖昧になる。接続詞は、特に書き言葉において、談話展開の直接的手がかりとして効果が高い。

（1c）の終助詞は、本来的には、ヨネ、ゼに代表される、日本語にのみ存在する品詞の区分である。しかしながら、英語においても、*y'know*、*though*、*right* など、文末に置かれることの多い不変化詞が存在する。これら節や文の最後に付く表現は、話し手の心的態度が、聞き手の理解や反応を確認するために表出される際に用いられる。まさに命題性の低い、モダリティ表現の典型であり、書き言葉で用いられることはほとんどない。だが、話し言葉においては、これらの表現が省かれることにより、命題性は損なわないものの、不自然な発話となることも多い。談話展開に寄与する文脈を作

り出す機能は大きいといえる。

（1d）の垣根表現は、アルイミ、イッシュノや、*kind of*、*frankly speaking* などが挙げられる。これまでの先行研究を鑑みるに、これらの表現自体が1語ではなく、複数の語から構成される定型句・定型節である場合が多い。まさに、話し手が聞き手に配慮した結果、より伝えたい命題の直接性を下げるために用いられる表現であり、しばしば待遇表現として観察される。なお、定型句を構成する語の観念的意味を受け継ぐ可能性があるため、（1a-c）の手段よりも命題性が高いことが予想される。

（1e）の感情表出系感動詞には、アッ、ウワッ、*ah*、*ouch* などが考えられる。一見すると、話し手の不随意的な発声であり、談話の展開に寄与しないと考えられる。しかし、話し手が意図するとしないとにかかわらず、命題性の低さとは反対に、一定の文脈を作り出す効果は持っているといえる。すなわち、聞き手がこれらの発話を聞くことにより、それ以後の談話の展開をある程度予想することが可能である。具体的には、*ah* に続く談話は話し手の驚きを示すなど、話し手の心的態度を明示することができるのである。話し言葉にのみ用いられる表現だが、非言語表現が明示できない書物などの分野では、しばしば効果的に感情表出系感動詞が文字化される。

（1f）のフィラーは、エー、アノー、*erm*、*um* など、話し手が沈黙を避ける、すなわち談話の流暢な展開を妨げないために、用いる表現である。これまで多くの先行研究が分析を試みており、言語教育の分野でも近年注目を浴びつつある。その使用の頻度は、言語間、あるいは文化間で差異がかなり見られると思われる。すなわち、沈黙を善としない文化においては、その分フィラーが用いられる頻度が高いと考えられるし、また沈黙を避けるためにフィラー以外の手段を用いる文化の存在も否定できない。さらに、その命題性の低さにより、母語話者には習得が容易である一方で、非母語話者が学習し使用する際には、かなりの不自然さを伴うことも多い。

（1g）のあいさつは、オヤスミや *hello* などが挙げられる。これらの表現は、1つの談話、話題を開始したり、終了したりするために用いられるという意味で、談話展開の重要な手がかりとなる。話し言葉、書き言葉を問

わず使用され、表現を構成する語の語源を母語話者でも意識していないものも多い。しかし、節や文などの小さなレベルにおいてはほとんど用いられることがないため、先行研究においてその談話展開の手がかりとしての重要性はあまり論じられてこなかったように思われる。

（1h）の応答表現は、ウン、イイエ、*yeah*、*no* など、相手の発話への是認あるいは否認を示す際に用いられるものである。一般に間投詞・感動詞といわれる表現の中でも、とりわけ命題性が高いといえる。また、談話展開の方向性を左右する重要な不変化詞である。話し手と聞き手の相互行為の中で用いられる表現であるため、一般に書き言葉においてはあまり見られない。

（1i）の呼びかけは、オイ、ヤア、*hi*、*hey* などが考えられる。（1e）とやや類似した性質を持っていると考えられるが、明確に聞き手への働きかけを伴うという意味で、より相互行為的である。また、談話の始まりのきっかけを作り出すという点で、（1g）とも関連が深い。しかし、相手の注意を喚起することが使用の目的であるため、話し手の心的態度を表すというよりも、むしろ話し手と聞き手の人間関係などの文脈を提供する機能が強い。

（1j）のかけ声は、エイッ、ヨシ、*come on* などが挙げられる。これらもまた、（1e）や（1i）と密接な連続性を持っていると考えられる。（1e）と違い、話し手が自らの心的態度を随意的に表出させるという特徴があり、また（1i）と違い、聞き手は必ずしも存在しない。

（1k）の相槌は、エエ、ウン、*uh-huh* などがあり、相互行為としてのコミュニケーションを論じる際に重要な手段である。しばしば（1h）と連続性をなすように思われるが、（1h）と違って、相手の発言の是認・否認ではなく、相手へ注意を傾けていることの表明であったり、自らの理解を確認している過程としての言語行動であったりする。また、言語・文化に応じて、かなり頻度の差が生ずるといわれており、言語によっては、頷きなどの非言語の手段を用いることの方が多いものもある。また、話し手と聞き手の人間関係によりその手段が異なる場合もある。

(1l) の非言語の手段は、顔の表情から身振り手振りまで、あらゆる方法が考えられる。前述の通り、言語・文化的差異も大きいが、これまでの言語的手段と同じように、談話の展開に一定の効果をもたらし、話し手と聞き手双方に、その把握への手がかりを提供する。

これらいずれの手段においても、使用者が自発的にそれらの表現と談話展開の関係性を解釈しなければ、それらは手がかりとして機能しえない。また、それらの使用による談話の展開の過程を観察するためには、話し手がなぜある手段を用いたのかという、話し手の思考の過程を把握することが不可欠である。それは、これらの手段が品詞や命題の明確さにかかわらず連続性を持っており、話し手が、聞き手との関係性も含めた使用域や状況に応じて、表現選択を無意識的に、かつ方略的に行なっているからである。これが、上述の12の言語・非言語の手がかりの機能に関する包括的研究を、難しくしている要因の1つであるように思われる。

4. 類型化への試みとその基準

(1) に挙げた12の手段が連続性を持っているとはいえ、それらをいくつかの基準で類型化することは決して不可能ではない。これらの手段は、命題性が低いにもかかわらず、適切に表現を選択しなければ、聞き手は不自然さを感ずることとなる。その選択において、われわれはどのような判断基準を持っているのであろうか。

まず、その機能の方向性に一定の差異があることが考えられる。前述の通り、(1a) 副詞は機能主義言語学における観念構成的機能が強く、(1b) 接続詞はテクスト形成的機能が強い。他方、(1g) あいさつや (1i) 呼びかけなどは、聞き手の存在が前提となるため、対人関係的機能が強いと考えられる。これらの機能の傾向は、例えば対人関係的機能が強い表現は、対人関係のあり方が言語・文化により異なるため、表現の使用についても異言語間の差異が大きいことが予想される。例えば、電話での会話において、日英語において、談話展開のための手段を構成する語の本来持っている命題的意味には、大きな違いがみられる。その一方で、テクスト形成的機能

が強い手段については、聞き手の理解しやすい段落構造について言語・文化間差異は小さいことが予想されるため、いかなる位相においても似たような使用のされ方をするように思われる。

次に、節、文、段落などにおいて、談話展開の手がかりがどのような場所に挿入されるのかについての差異は、考慮に値する。(1d) 垣根表現や (1f) フィラーは、話し手が直接的あるいは即時的に聞き手に伝えることが困難な情報に近接して、挿入される傾向にある。一方で、(1c) 終助詞は、文字通り節や文の終わりに挿入され、話し手がそれまでに述べた情報の最後に心的態度を付加する目的で用いられる。また、(1g) あいさつや (1i) 呼びかけは、前述の通り談話や会話の開始や終了のきっかけの標識となり、(1h) 応答表現や (1k) 相槌は、話し手の談話の区切りに応じて聞き手が用いる。このような手がかりを挿入する部分が不自然であった場合、談話構造の適切な理解は妨げられてしまうのである。

話し手の心的態度の度合いについても、これらの手段は同一ではない。例えば、(1h) 応答表現は心的態度を明確に示す手段であり、また心的態度そのものがその表現の命題となっている。また、(1a) 副詞は、その本来的役割として使用者の心的態度を表しうるものであり、タシカニ、*certainly* などの副詞語句を応答表現としても使用することがあるという事実が、それを表している。(1e) 感情表出系感動詞や (1j) かけ声などは、命題性をほとんど有しない一方で、使用者の心的態度をそのまま表すという意味で、発話が起こっている文脈を体現する重要な手がかりとなる。ここで注目すべきは、命題性と心的態度の大きさとは決して比例・反比例する関係ではないということである。すなわち、(1a) や (1h) は、命題性と心的態度の度合いの両者とも高いが、(1e) や (1j) などは、心的態度の度合いのみ高い。さらに、(1g) あいさつや (1i) 呼びかけは、命題や心的態度を表すというよりも、むしろ文脈を作り出すために儀礼的に用いられるものである。命題性や心的態度の度合いは必ずしも談話展開の手段において必須の要素ではないということがわかる。

このようにいくつかの基準によって類型化を試みることにより、談話展

開の手がかりの多様性を確認することができる。本来的な機能や使用法、意味の強さが異なることにより、使用者は適切にそれらの表現を選択して使用することができる。これらの基準に基づいた意識的・無意識的な言語使用が、どのように談話展開の手がかりの使用を通じた文脈の形成に差異をもたらすのか、その過程を探ることが今後の研究に必要な観点である。そのためには、さまざまな位相における実際の使用の観察にとどまらず、話し手・聞き手がその手段を使用した動機や方略の過程を分析する方法論が、必要であると思われる。

5. 結論

談話展開のための言語・非言語の手段については、これまでさまざまな術語のもとに、品詞やその構成する語の意味の枠組みを維持しながら、個別的に議論がされてきた。しかしながら、あまたある談話展開の手がかりを、命題性が比較的低いという共通点から包括的に観察することで、話し手と聞き手の心的態度とその談話への文脈化の過程を明らかにできる可能性がある。本稿では、12の手段を列挙し、その機能について考えたのち、言語使用において、それらの表現選択の基準はいかなるものなのかを議論した。

これらの議論は、言語教育の分野において大きな貢献が期待できる。前述のように、命題性が低い表現は、母語話者は無意識的に習得するにもかかわらず、非母語話者は意識的な学習すら困難である。それは、命題性が低い表現は、まず言いたいことを伝えるというコミュニケーションの根底・初歩の段階において、それほど重要ではないからである。また、とりわけ非言語の手段に代表されるように、言語・文化間の差異が大きく、非母語話者が無意識的に習得している母語の方略が、学習言語の使用の際に大いに干渉する可能性があるからである。近年発達している言語運用能力テストの分野においても、フィラーや相槌などの熟達度を測る際に、個別文化特有の要素をいかに考慮するかが課題となっている。談話展開のための手段は、もはや段落・複段落を構成するためだけではなく、談話を通じて対

人関係を調整したり、文化的規範を表出したりなど、あらゆる機能を持っているといえる。

また、言語使用の過程をより詳細に把握することを目的とする、談話分析・会話分析のエスノメソドロジーの分野においても、談話展開の手がかりは言語・非言語問わず、ますます注目されていくと思われる。序論で述べたように、言語の発信者は、言語の線状的性質を克服するため、言語・非言語資源を方略的に活用することが求められる。また、受信者は、その資源の活用の意図を理解し、応答表現や相槌などを適切に活用し、相手に次の談話展開の方向性を示さなければならない。よって、談話参与者のコミュニケーションの過程を観察することが不可欠となる。観察の難しい非言語の手段についても同様に、分析の対象として取り上げる必要性が、近年の研究で注目されてきている。

近年、言語コミュニケーションの媒体は、単純な会話における話し言葉や、静態的に文字化された書き言葉ばかりではなくなってきている。インターネット上の相手の見えない会話や、メールなどの新たな書き言葉文化の出現により、今後ますます話し言葉と書き言葉などの位相の連続性が高まることが予想される。その中で、いかに言語・非言語を効果的に用い、高度な談話を展開させていくか、またその文脈を受信者に理解してもらうかが、適切で円滑なコミュニケーションに不可欠な方略的知識となる。命題性の低い表現の使用と機能について分析し、その知識を、言語を使用する者が持つことにより、誤解の少ない言語使用が実現されるに違いない。

参考文献

Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.

Halliday, M. A. K. & Matthiessen, C. (2004). *An introduction to functional grammar*. 3rd ed. London: E. Arnold.

庵功雄ほか. (2001).『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』. スリーエーネットワーク.

井上逸兵. (2007).「コンテクスト化のプロセスとコミュニケーションの生態系」.「言語と人間」研究会.『HLC Handbook 2007 第33回春期セミ

ナー・ハンドブック』. (pp.2–4).
和泉絵美・井佐原均・内元清貴 . (2005). 日本人1200人の英語スピーキングコーパス . アルク .
大石初太郎 . (1954).「日常談話の接続詞」『言語生活9』. 筑摩書房 .
佐久間まゆみ . (1992).「談話表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要41』. (pp.9–22).
Schiffrin, D. (1987). *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
Schiffrin, D. (2001). "Discourse markers: Language, meaning, and context." in *The handbook of discourse analysis*: 54–75.
Schourup, L. (1999). "Discourse markers." in *Lingua* 107: 227–265.